

実践研究

中学校の体育授業への責任学習モデル導入に向けた検討 —保健体育科教師へのインタビューを通して—

Study looking to the introduction of the Teaching Personal and Social Responsibility (TPSR) model into physical education in junior high schools
—Through interviews with health and physical education teachers—

比嘉 靖¹⁾ 梅垣 明美¹⁾ 村上 なおみ¹⁾
Yasushi Higa¹⁾ Akemi Umegaki¹⁾ Naomi Murakami¹⁾

Abstract

The purpose of this study was to clarify problems associated with the introduction of the Teaching Personal and Social Responsibility (TPSR) model into physical education classes and how physical education teachers in schools where the TPSR model was practiced recognized methods of corresponding to these problems. The study method was to conduct semi-structured interviews with physical education teachers who practiced the TPSR model. The interviews were then analyzed using M-GTA. The analysis found the following two points as a result.

First, the study found that physical education teachers who conducted the TPSR model recognized the problem associated with the use of the TPSR model that some procedures of the TPSR model were difficult to implement in junior high schools with issues. They also recognized that it was acceptable to omit or simplify these procedures as a way of corresponding to problems. Second, the study found that the teachers recognized the importance of making students aware of behavioral goals based on a posted level chart that indicated gradual behavioral goals that students were to achieve as an essential procedure to improve the educational effect of the TPSR model.

キーワード 責任学習モデル, 教育困難校, 半構造化インタビュー, M-GTA, 教師行動の変容, 生徒の態度変容
TPSR model, School with educational difficulties, Semi-structured interview, M-GTA, Changes in teacher behavior, Changes in student attitude

1. 緒言

平成 29 年度の児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果によれば、小・中・高等学校における暴力行為（対教師暴力、生徒間暴力、対人暴力、器物破損）の発件件数（63,325 件）は、前年度（59,444 件）より増加した（文部科学省, 2018）。このような暴力行為に至らないとしても、学校現場では、授業エスケー

プ、授業妨害（授業中の立ち歩きなど）、教師への暴言、友達へのいたずらなどが頻発し、授業が成立しにくい状況が問題となっている（松浦・中川, 1998；岡崎, 2018）。

体育では、先述のような授業が成立しにくい課題を抱えた学校に、米国の Hellison（2003）が開発した責任学習モデル（“Teaching Personal and Social Responsibility Model”）^{注1)}を導入し、児童

1) 大阪体育大学 体育学部

School of Health and Sport Sciences, Osaka University of Health and Sport Sciences

生徒の態度変容を促し、授業改善を行ってきた。例えば、梅垣ほか(2006)、梅垣ほか(2011)、梅垣ほか(2016)の研究、体育科教育に関する雑誌に発表されたK小学校教諭^{注2)}(2015)、梅垣(2015)、田中・濱田(2015)の報告がある。

このように責任学習モデルは、生徒の態度変容および授業改善に効果を発揮することが確認されている。しかしながら、課題を抱えた中学校では、責任学習モデルを体育授業に導入することを阻む要因が認められる。例えば、以下の2点が挙げられる。

第1に、責任学習モデルの指導は、多忙な保健体育科教師(以下「体育教師」と略す)に時間的な負担を強いることが挙げられる。責任学習モデルは、個人的、社会的な責任を果たす行動目標を生徒に段階的に示し、それらを守らせる指導であり、次のような手続きを伴う(Hellison, 2003)。具体的な手続きとして、体育教師には、①行動目標を示したレベル表を作成し、掲示する、②授業の導入時に行動目標を生徒に意識づける話をする、③授業後半にグループ討議を設定する、④授業のまとめ時に授業中の行動を振り返らせる、⑤体育授業以外の場面において生徒一人ひとりと話をするなど求められる(Hellison, 2003)。中学校の体育教師は、日々校務分掌をこなしながら、教科指導、学級経営、部活動指導、および、生徒指導などに多くの時間を費やしており、責任学習モデルの導入に伴う手続きに時間を取ることが難しいのではないかと考えられる。

第2に、責任学習モデルは、生徒の状況によっては指導そのものが難しいことが挙げられる。先述のように、近年、学校では授業が成立しにくい状況が見受けられる(松浦・中川, 1998; 岡崎, 2018)。責任学習モデルの指導では、授業の導入時に教師の話を聞かせること、授業中にグループ討議を行わせること、毎時間振り返りのために自己評価を書かせることを実施する。生徒の状況によっては、これらの遂行そのものが難しい状況が想定される。

以上のことが想定されるが、責任学習モデルを通して、生徒の態度変容および授業改善が期待できるのであれば、日本の体育授業に責任学習モデル

を導入することを前向きに検討しても良いのではないかと考えられる。その前に、責任学習モデルの体育授業への導入に向けて、責任学習モデルを体育授業に導入する際に生じる問題と、この問題に対応した導入方法を明らかにしておくことは意味のあることと言えよう。具体的には、責任学習モデルを体育授業に導入する際に学校現場では何が問題となっているのか、この問題に対応してどのような工夫をすればよいのかを明らかにする。このことを通して、責任学習モデルの体育授業への導入がスムーズに行われるのではないかと考えられるからである。しかしながら、責任学習モデルの体育授業への導入に伴う問題とこの問題に対応した導入方法について検討した研究はみられない^{注3)}。

そこで、本研究では、日本の体育授業への責任学習モデル導入に伴う問題とこの問題に対応した導入方法を明らかにすることを目的とした。具体的には、責任学習モデルを実施した中学校の体育教師にインタビューを行い、責任学習モデルを実施した体育教師が、責任学習モデルの導入に伴う問題とこの問題に対応した導入方法をどのように認識したのかを明らかにした。

本研究では、授業妨害や教師および友達への暴言などがみられる課題を抱えた中学校を対象とした。それは、次の理由からであった。第1に、責任学習モデルの導入により、課題を抱えた中学校に顕著にみられる生徒の不適切な行動を改善する効果が期待できること。第2に、生徒の態度変容および授業改善が期待できるが、課題を抱えた中学校では、責任学習モデルの導入そのものに困難な状況が予測されること。第3に、課題を抱えた中学校を対象とすることにより、責任学習モデルの導入に伴う問題とこの問題に対応した導入方法がより明確になるのではないかと考えたことである。

2. 方法

2.1 対象

責任学習モデルを実施した公立中学校の体育教師2名を対象とした^{注4)}。表1は、対象者の概要を示している。T1は、30代男性、教職経験

年数10年の体育教師であった。T2は、20代男性、教職経験年数3年の体育教師であった。

表1 対象者の概要

対象者	性別	年齢（歳）	教職経験年数（年）
T1	男性	30代	10
T2	男性	20代	3

2.2 柔道の単元計画および責任学習モデルの設定

平成29年10月上旬から10月下旬に実施した柔道単元（6時間）に責任学習モデルを導入した。T1は、中学校第3学年の男子生徒を、T2は、中学校第2学年男子生徒の体育授業をそれぞれ担当した。表2は、柔道の単元計画を示している。学習する技は異なるが、2年生と3年生ともに同じ学習過程とした。

表2 柔道の単元計画

時間	1時間目	2・3時間目	4・5時間目	6時間目
導入	オリエンテーション ・柔道の授業の進め方 ・責任学習の進め方 ・グループ分け	集合・挨拶・責任学習（気づきの話） 準備運動・補助運動		
活動1	責任学習（気づきの話）	○技の説明	○技の説明（ビデオ視聴）	
	・柔道着の着方 ・礼法（立礼、座礼、 たち方、すわり方）	○受け身の理解と練習 ○固め技の理解と練習	○投げ技の理解と練習	
		○グループ毎の練習	○グループ毎で 投げ技の約束練習	
活動2	責任学習（振り返り）			○グループ毎で 投げ技の約束練習 責任学習（振り返り）
まとめ	調査	責任学習（振り返り）		調査
		本時のまとめ、片付け		

責任学習モデルの指導について、中学生を対象に責任学習モデルの有効性を検証した梅垣ほか（2011）を参考にした。責任学習モデルの指導は、授業の導入時に行う気づきの話、授業後半に行うグループ討議、授業のまとめ時に行う振り返り、授業の前後に生徒と1対1で行うカウンセリングの4つで構成されていた。具体的には以下のような指導を行った。

第1に、個人的、社会的な責任を果たす行動として生徒に守らせる行動目標を段階的に示したレベル表（表3）を作成し、それを体育館の壁に掲示した。レベル表は、Hellison(2003)をもとに指導歴5年の中学校体育教師と協力して作成した「がんばりレベル表」（梅垣ほか、2011）を用いることとした。ただし、本授業を担当する体育教師と協議の上、生徒の実態に合わせて一部変更した。

第2に、授業の導入時に気づきの話として、個人的、社会的な責任を果たすことの重要性を意識させるような話を短く行った。その中で、レベル表を指さしながら本時の行動目標を意識させた（表2の網掛け部分、気づきの話）。運動学習の場面では、体育教師はレベル表に示された行動を守るように促した。例えば、「今日の目標は、初級レベルを達成すること。意識して課題に取り組もう」とか、「まだ少し無責任な子がいる。仲間が注意してあげよう」などと声をかけた。

第3に、授業のまとめ時に振り返りとして、授業中の行動について、レベル表に示された行動目標を守ることができたかどうかについて自己評価を行わせた（表2の網掛け部分、振り返り）。

第4に、授業の前後に、生徒と1対1で話をする時間をとった。授業中の態度について、頑張っていることをほめてあげたり、もっと伸ばすために励ましたりした。

これらに加えて責任学習モデルでは、授業後半に各自がどのような行動をしていたか、グループでの決定は妥当であったかなどをグループで話し合う時間を設ける。しなしながら、本研究が対象とした中学校では、生徒同士の話し合いが成立しないことが想定されたため、グループ討議を省略することとした。

表3 責任レベル

レベル	レベルの内容	具体的な行動例
レベル0	無責任 （人に迷惑を かけるレベル）	先生が指導している時、あるいは友達と話している時、私語をした。 自分の行動に責任をとらなかった（失敗を他人のせいにした。注意されたが反省しなかった）。 今日の活動に積極的に参加しなかった。 他人を傷つけたり、ふざけたりした。
レベル1	修行レベル （迷惑をかけないよう にふるまうレベル）	先生が指導している時、あるいは友達と話している時、私語をがまんした。 悪口をいったり、友達を罵倒しなかった。 友達と意見が違ったが、話し合いで解決した。 メンバーの誰かが、かかえのないグループの一員であると思って行動した。
レベル2	初級レベル （自分のために 頑張るレベル）	意欲を持って取り組んだ。 課題達成のために努力した。 新しい課題に前向きに挑戦した。
レベル3	中級レベル （自律した行動が とれるレベル）	課題に対して、あらかじめ最後まで取り組んだ。 人に言われなくても自分から進んで課題に取り組んだ。 課題を解決するためには、何をしたらよいかわかった。 授業内容以外の友達の話には参加しなかった。 ふざけている友達を注意した。
レベル4	上級レベル （友達のために がんばるレベル）	うまくできない友達を助ましたり、教えてあげたりした。 参加しないメンバーを誘って参加させた。 うまくできた友達には、一緒に喜んで、ほめてあげたりした。 先生の指示やグループの決定に従った。
レベル5	体育の授業以外でも 責任ある行動が とれるレベル	体育の授業以外の教科、その他の学校生活でも責任をもって行動した。

2.3 データ収集

このような責任学習モデルを実施した体育教師に半構造化インタビューを行った。実施時期は平成 30 年 3 月であった。授業は 10 月に実施したが、責任学習モデル実施の効果として生徒の行動変容などを確認するため、指導モデル実施から 5 か月を経過した平成 30 年 3 月にインタビューを行った^{注5)}。インタビューを開始する前に、対象者に研究目的、インタビューを IC レコーダーで録音することを説明し、同意を得た。

インタビューに際し、インタビューガイドを作成した。インタビューガイドは、以下の手順に従い作成された。第 1 に、メリアム(2004, pp.110-115)を参考に、2 つのことを同時にたずねる多重質問、誘導質問、「はい-いいえ」で答えられる質問を避けた。第 2 に、中学校教育および責任学習モデルの実施方法について十分に理解している研究者 2 名が責任学習モデルに関する質問として適切かどうかを確認した。表 4 は、インタビューガイドを示している。

表 4 インタビューガイド

1. 責任学習モデルの実施結果について ・責任学習モデルの実施結果をみて、どのように思いましたか。
2. 責任学習モデルの実施中の生徒の様子について ・責任学習モデルを実施している時、体育の授業中における生徒の様子はどうか。 ・クラス全体、指導に困難を要する生徒 ・責任学習モデルを実施している時、体育授業以外の場面（他教科、部活動、家庭など）における生徒の様子はどうか。クラス全体、指導に困難を要する生徒
3. 責任学習モデルの実施後の生徒の様子について ・責任学習モデルの実施後、体育の授業中における生徒の様子はどうか。 ・クラス全体、指導に困難を要する生徒 ・責任学習モデルの実施後、体育授業以外の場面（他教科、部活動、家庭など）における生徒の様子はどうか。クラス全体、指導に困難を要する生徒
4. 責任学習モデルの手続きについて ・責任学習モデルの指導において、生徒の態度変容が必要であったと思われる手続きは何か。 ・責任学習モデルの指導において、生徒の態度変容に必要なと思われる手続きは何か。 ・責任学習モデルは、自然とする行動を示し、それを守らせる指導法ですが、どのような指導法についてどのように思われますか。
5. 責任学習モデルの指導について ・中学校の先生は、学習指導、学級経営、部活動指導、生徒指導の他、校務分掌があり、大変忙しくされており、このような中、責任学習モデルを実施するにあたり、どのように工夫したら実施しやすいですか。 ・多忙の中、責任学習モデルを実施することをどのように思いますか。
6. 責任学習モデルの影響について ・責任学習モデルを通して、あなたの指導はどのように変わりましたか。

インタビューの時間は、T1 が約 53 分、T2 が約 39 分であった。インタビューは、インタビューガイドに基づき行われたが、会話の流れによって質問の内容や順番を変えるなど柔軟に対応しながら行われた。インタビュー内容は、IC レコーダーで録音され、インタビュー後逐語録が作成され、すべて文字化された（以下「文字データ」と略す）。

2.4 分析方法

分析には、木下(2003)によって提唱されている修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (Modified Grounded Theory Approach, 以下「MGTA」と略す)を採用した。

MGTA は、①人間と人間が直接的にやり取りをする社会的相互作用に関わる研究、②ヒューマンサービス領域に関わる研究、そして③対象とする現象がプロセスの性格を持っている研究に適している(木下, 2003, pp.89-90)。本研究は、教育というヒューマンサービス領域において、教師と生徒との相互作用を通して教師と生徒の成長を促すというプロセスの性格を持った現象を扱っている。そこで、インタビューにより収集したデータを MGTA によって分析することとした。

木下(2003, 2007)に基づき、以下のように分析を進めた。

第 1 に、分析テーマを「責任学習モデル実施にかかわる体育教師の認識プロセス」とし、分析焦点者を「責任学習モデルを実施した体育教師」とした。

第 2 に、1 人の文字データに目を通し、分析テーマに関連する箇所注目し、そこから具体例を抽出した。その具体例をもとに概念を生成し、概念ごとに分析ワークシートを作成した。分析ワークシートには、①具体例を短い言葉で表現する「概念名」、②具体例を解釈した意味を短文で示す「定義」、③分析データから抽出された「具体例」、そして④解釈する過程で生じた他の解釈案、類似例、対極例などの様々なアイデアを記述する「理論的メモ」欄を設定した。

表 5 は、分析ワークシートの 1 例を示している。分析を進める中で、分析ワークシートに新たな具体例を追加したり、あるいは、新たな概念を生成したりした。2 人の対象者から具体例が抽出できない場合は、その概念は有効でないと判断した。また、この作業を繰り返しながら、設定した概念名および定義が収集した具体例に対して適切かどうかを見直し、適宜修正を加えた。解釈が恣意的にならないように、生成した概念のすべてについて、類似例あるいは対極例の観点からデータを確認した。

表5 分析ワークシートの例

概念名	生徒と教師の信頼関係
定義	生徒が教師を信頼するようになる
具体例	○全席カマやカマやて言うんです。何か手伝ってあげたら、何かしてあげたらカマや、先生とも言わないんですけど、誰かティッシュ持ってきてくれたらカマやて言うんです。ずっとみんながどの先生にも言っていたのがもうカマは言わなくなりました。全部「有難う」になりました。それは全く変わりました。(T1) ○大人に対する信頼、先生に対する信頼も全くなかったんで、それが最後はみんな3年生の先生ええ先生らばかりやっていたことは多くの子が言うてました。(T1) ○先生を先生と思えるようにあの先生はなかった。それは担任の先生とか関わってくれた先生らもうやなし、みなさんのおかげやと思いますけど。(T1) ○僕自身が生徒を認めてあげるじゃないですけど、そうなったから変わったような気がします。僕が変わって、生徒も変わったという感じですね。(T2) ○3学期になっていわれたのは、たぶん僕が本当に変わったからやと思うんですけど、「T2」話聞てくれるようになった」って。(T2) ○信頼関係じゃないですけど、だから先生の話も聞こうかと思う時ができたかなって。(T2)
理論的メモ	・教師の生徒への接し方が変わり、生徒が教師を信頼するようになる。 ・体育教師以外の先生への信頼もみられる。 ・信頼関係ができたため、授業がしやすくなる。

第3に、作成した概念について、概念と概念の関係を検討し、複数の概念を説明することのできるより包括的なまとまりであるカテゴリーを生成した。カテゴリーがさらに分化可能である場合は、サブカテゴリーを設定した。

第4に、カテゴリーおよび概念相互の関係から、責任学習モデル実施にかかわる体育教師の認識プロセスについてストーリーラインを作成し、これらを結果図にまとめた。

なお、分析の妥当性を得るため、メリアム(2004, pp.297-298)に基づき、①中学校教育に理解のある研究者2名で協議を行い、分析結果に修正を加えた(仲間同士での検証)、さらに②分析データの解釈についてインタビュー対象者による確認を行った(メンバー・チェック)。

なお、本研究は、協力校の学校長および担当教師に、研究計画および調査内容について、文書および口頭で十分な説明を行い研究の同意を得て行われた。本研究の実施に際して、筆頭著者が所属する大学の研究倫理審査委員会の承認を得た。

3. 結果

M-GTAによる分析の結果、4つのカテゴリーと12の概念が生成された。図1は、これらの全体的な関連を結果図として示している。以下、概念を〈 〉、サブカテゴリーを[]、カテゴリーを【 】で表記する。

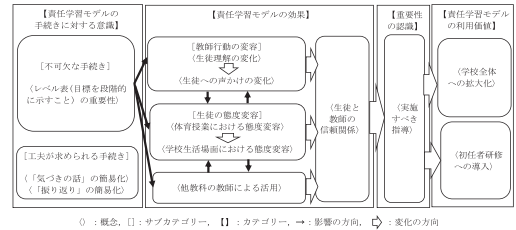


図1 カテゴリー、サブカテゴリー、および、概念の関係図

3.1 全体像としてのストーリーライン

責任学習モデル実施にかかわる体育教師の認識プロセスに関するストーリーラインは以下の通りであった。

責任学習モデルを実施した体育教師は、責任学習モデルの実施を通して【責任学習モデルの効果】を実感するようになった。具体的には、生徒に守らせる行動目標を段階的に示したレベル表をもとに〈生徒理解の変化〉を経験し、そのことから〈生徒への声かけの変化〉という[教師行動の変容]を進めていく。教師の指導が変わったこと、および、レベル表に基づく指導の影響により、[生徒の態度変容]は、〈体育授業における態度変容〉にとどまらず〈学校生活場面における態度変容〉へと進んでいく。さらに、責任学習モデルの実施は、他教科の教師を巻き込み、責任学習モデルの〈他教科の教師による活用〉を引き起こすことになる。これら様々な要因がからみあって〈生徒と教師の信頼関係〉が構築されていった。

また、体育教師は、これらの経験を通して、[生徒の態度変容]をもたらし責任学習モデルの[不可欠な手続き]として〈レベル表(目標を段階的に示すこと)の重要性〉を意識するようになる。一方、[工夫が求められる手続き]として、〈「気づきの話」の簡易化〉と〈「振り返り」の簡易化〉を意識する。最終的には、多くの業務を抱えた忙しい中でも、責任学習モデルを〈実施すべき指導〉であると理解するようになる(【重要性の認識】)。さらには、【責任学習モデルの利用価値】として、責任学習モデルの効果を高めるために〈学校全体への拡大化〉、および、新任教師の指導力向上に役立てるために〈新任者研修への導入〉を主張

した。

3.2 カテゴリー，サブカテゴリー，概念の概要

表6は、カテゴリー、サブカテゴリー、および、概念の一覧を示している。ここでは、表6で示したカテゴリー、サブカテゴリー、および、概念の関係を説明する。なお、説明に際し必要であれば、体育教師の発言を「 」で引用する。

表6 カテゴリー，サブカテゴリー，および，概念の一覧

カテゴリー	サブカテゴリー	概念	定義
重要性の認識	—	実施すべき指導	日頃の業務が忙しくても実施すべき指導である
責任学習モデルの効果	教師行動の変容	生徒理解の変化	これまでは「いいか、悪いかわ」のような見方をしていたが、生徒の成長過程を認めることができるようになる
		生徒への声かけの変化	少しでもよくなった場合は、それを認めて生徒をほめる
	生徒の態度変容	体育授業における態度変容	体育の授業態度が改善する
		学校生活場面における態度変容	体育授業以外の学校生活場面において生徒の態度が改善する
	—	生徒と教師の信頼関係	生徒が教師を信頼するようになる
責任学習モデルの持続性に対する意識	—	他教科の教師による活用	他教科の教師が責任学習モデルを授業に取り入れ、指導に活用する
	不可欠な手続き	「レベル表（目標を段階的に示すこと）」の重要性	目標が明確であること、および、生徒と教師が今の到達点を共有できることから指導が行いやすい
	工夫が求められる手続き	「気づきの語」の簡易化 「振り返り」の簡易化	本時の目標を生徒に意識させることが目的であるから、慣れてきたら訓話の必要性は低くなる 毎時間振り返りとして自己評価カードを書かせているが、違う方法を実施してもよい
責任学習モデルの利用頻度	—	学校全体への拡大化	学年、あるいは、学校全体で取り組むべき指導である
	—	初任者研修への導入	生徒を変えることに加えて先生も変わる契機となるプログラムである

3.2.1 【重要性の認識】カテゴリー

【重要性の認識】カテゴリーは、〈実施すべき指導〉という概念で構成された。体育教師は、責任学習モデルの実施を通して、このモデルの重要性を認識するようになった。対象校のような課題を抱えた中学校では教師は多くの業務を抱えて大変忙しい状況にある。責任学習モデルの実施には、授業前の準備、運動学習の指導に加えて責任学習モデルの指導と、教師には多くの負担がかかる。このような状況でも、体育教師は、このモデルが日頃の指導の手助けになるという理由から、忙しくても実施すべき指導であると主張した。

3.2.2 【責任学習モデルの効果】カテゴリー

【責任学習モデルの効果】カテゴリーは、〈生徒理解の変化〉と〈生徒への声かけの変化〉の2つの概念からなる[教師行動の変容]というサブカテゴリー、〈体育授業における態度変容〉と〈学校生活場面における態度変容〉の2

つの概念からなる[生徒の態度変容]というサブカテゴリー、加えて〈生徒と教師の信頼関係〉と〈他教科の教師による活用〉という2つの概念で構成された。

体育教師は、責任学習モデルを実施しながらこのモデルの教育的な効果を実感していく。[生徒の態度変容]を意識する前に、T2は、これまで生徒を「0か10か」というような見方をしていたが、段階的に行動目標を示すレベル表を通して、生徒の少しの成長を見取り、それを認めることができるようになっていった〈生徒理解の変化〉。同時に、生徒の少しの成長を積極的にほめるようになった〈生徒への声かけの変化〉。同様にT1も、レベル表を通して、現時点での生徒の到達点と目標とすべき到達点を、生徒と共通認識するようになり、レベル表をもとにした声かけを行うようになった〈生徒への声かけの変化〉。

このような[教師行動の変容]は、体育における生徒の授業態度を変え〈体育授業における態度変容〉、体育授業以外の〈学校生活場面における態度変容〉をもたらしようになった。具体的な態度変容として、体育教師は以下のような事例を挙げた。例えば、体育授業において生徒たちは、早く来て道具の準備をしたり、ふざけている生徒に注意をしたりできるようになっていった。また、体育授業以外の場面では、集会においていつまでも騒がしく整列できなかった生徒たちが、短い時間で静かに整列できるようになっていった。

さらに、責任学習モデルの実施は、他教科の教師にも広がった〈他教科の教師による活用〉。例えば、授業中の立ち歩きや教室外に出ることがなくなり、座って授業を受けるようになっていった。このような態度変容とともに徐々に生徒は、体育教師とそれ以外の教師も含めて教師全員を信頼するようになり、素直に教師の指示に従う姿がみられるようになった〈生徒と教師の信頼関係〉。

3.2.3 【責任学習モデルの手続きに対する意識】 カテゴリー

【責任学習モデルの手続きに対する意識】 カテゴリーは、〈レベル表（目標を段階的に示すこと）の重要性〉という概念からなる[不可欠な手続き]というサブカテゴリーと、〈「気づきの話」の簡易化〉と〈「振り返り」の簡易化〉という概念からなる[工夫が求められる手続き]というサブカテゴリーで構成された。

体育教師は、責任学習モデルの実施を通して、生徒の態度変容を導くために[不可欠な手続き]と[工夫が求められる手続き]があることを意識しはじめる。[不可欠な手続き]として、行動目標を段階的に示したレベル表の掲示、および、レベル表を生徒に意識させることをあげた〈レベル表（目標を段階的に示すこと）の重要性〉。一方、[工夫が求められる手続き]として、体育授業の導入時に行う責任ある行動を生徒に意識させる〈「気づきの話」の簡易化〉、および、体育授業のまとめ時に行う自己評価カードの記入による〈「振り返り」の簡易化〉をあげた。

体育教師からは以下の発言が得られた。「気づきの話」について、T1は、話をじっくり聞かすというより「今日はレベル2やでとか、僕が言って聞かすという話だけになっちゃった」、同様にT2も、「レベル1ができてない子はレベル1を目指したらいいんですけど、できるようになってきた子はレベル2を目指そうかみたいな感じで、僕自身もそれだけを指さしていうので、説明もめっちゃ短くなってるんですよ。活動に入る時間はめっちゃ短縮されました」と発言した。すなわち、訓話として「気づきの話」をじっくり聞かせるのではなく、徐々に、生徒に身に付けてほしい行動についてポイントを絞って示すだけになっていったことが話された〈「気づきの話」の簡易化〉。

「振り返り」について、T1は、「あそこ（自己評価）に時間を取らないといけないうのは運動量としては確保しきれない。楽しい所を切っちゃわないといけな部分もある

し、それ（自己評価）を使う使わんはその先生の感覚に任せていいんやったら（（ ）は筆者）」と発言した。またT2は、「最初は必要かなとは思んですけど。だんだん子どもたちの中でも目標が入ってきたらアンケートなしでも振り返りができる」、「アンケートなしでやるんやったらすごくやりやすいと思う」と発言した。すなわち、「振り返り」について、生徒の状況に応じて、自己評価カードに代用できる方法で「振り返り」をさせてもよいという意見が出された〈「振り返り」の簡易化〉。

3.2.4 【責任学習モデルの利用価値】 カテゴリー

【責任学習モデルの利用価値】 カテゴリーは、〈学校全体への拡大化〉および〈初任者研修への導入〉という2つの概念で構成された。

最終的に体育教師は、多忙な中でも責任学習モデルを〈実施すべき指導〉として、その重要性を認識した。【重要性の認識】は、体育授業において実施することにとどまらなかった。例えば、T1は、「個人でやるものじゃない気がします。それこそ学年であったり、学校であったりということと取り組むと、ほんとに効果があることのような気がした」、同様にT2も、「全クラスに掲示してみたいな感じにやるんやったら、全員が目標を共有できるので」と、〈学校全体への拡大化〉を期待する発言を行った。

加えて、〈初任者研修への導入〉を期待する発言がみられた。例えば、T1は、生徒が守る行動目標が「区分されて目に見える状態にあるというのは若い先生らにとって、経験のない先生らにはすごく有難い大きなことかなと思いますけど」と、経験のない教師にとって非常に役立つ指導であると発言した。T2は、「初任研修でやってもいいのかなって思いました」と、〈初任者研修への導入〉を直接的に期待する発言を行った。特にT2は、責任学習モデルの指導を通して生徒の態度変容を導くことができたことから責任学習モデルの〈初任者研修への導入〉と強く意識したのではないかと考えられる。

4. 考察

本研究では、責任学習モデルを実施した中学校の体育教師にインタビューを行い、責任学習モデルを実施した体育教師が、責任学習モデルの導入に伴う問題とこの問題に対応した導入方法をどのように認識したのかを明らかにした。その結果、責任学習モデルを実施した体育教師は、第1に、責任学習モデルの導入に伴う問題として課題を抱えた中学校では遂行が難しい手続きがあること、第2に、この問題に対応した導入方法として遂行が難しい手続きを簡易化すること、を意識していたことが示された。

第1に、責任学習モデルを実施した体育教師は、授業の導入時に、本時の行動目標を生徒に意識させるために行う「気づきの話」の遂行が難しかったと主張した。課題を抱えた中学校の生徒には、話を聞くよりも体を動かすことを好む傾向がみられ、2分という短い時間でも生徒に話を聞かせることが難しい時があった。Hellison(2003, p.43)は、「気づきの話」について、2、3分で手短に行うことを主張している。本研究では、2分でも話を聞かせることが難しい状況が見受けられた。このような場合、本時の目標として、生徒に身に付けてほしい行動についてポイントを絞って示すだけでもよいのではないかと考えられる。実際、体育教師からは、レベル表を指しながら生徒に身に付けてほしい行動についてポイントを絞って確認するという指導が多くなったことが報告された。

第2に、責任学習モデルを実施した体育教師は、授業のまとめ時に、授業中の行動を振り返りとして行う自己評価カードを記入させることが難しかったと主張した。T1とT2は、自己評価カードを書かせるのではなく、できたかどうかを挙手させるなどの方法でもよいのではないかと述べた。実際に、T2は、体育授業の中で、振り返り時に自己評価カードを使用しなかったこと、それでも生徒の態度変容が認められたことを報告した。自己評価について、Hellison(2003, pp.49-50)も、様々な方

法が使用できると述べており、授業中の態度を生徒に振り返らせるという目的にかなえば、別の方法を使用してもよいのではないかと考えられる。

この他、対象校では、グループ討議を行わせることが大変難しい状況にあったため、グループ討議を設定しなかった。

このように本研究では、責任学習モデルの手続きがいくつか簡易化、あるいは、省略して行われた。それにもかかわらず、責任学習モデルを実施した体育教師は、教師行動の変容、生徒の態度変容、および、生徒と教師の信頼関係が構築されるという責任学習モデルの教育効果を認めていた。すなわち、責任学習モデルの手続きである「気づきの話」、「振り返り」、および、「グループ討議」を簡易化、あるいは、省略しても責任学習モデルの教育効果が認められるのではないかという可能性が示唆された。

一方、責任学習モデルを実施した体育教師は、このモデルの教育効果を高めるために不可欠な手続きとして、生徒に守らせる行動目標を段階的に示したレベル表の掲示、および、レベル表をもとに行動目標を生徒に意識させることが重要であると主張した。

責任学習モデルは、「生徒が成長し、生徒自身が幸せになるために、そして他の人を幸せにするために責任を果たすことを教える」(Hellison and Martinek, 2006, p.611) 指導モデルである。このことを実現するため、個人的、社会的な責任を果たすことを生徒に身に付けさせる指導である。この根本理念を果たせば、学校や生徒の実態に合わせて責任学習モデルの手続きを簡易化できるのではないかと考えられる。

5. 結論

本研究では、責任学習モデルを実施した中学校の体育教師にインタビューを行い、責任学習モデルを実施した体育教師が、責任学習モデルの導入に伴う問題とこの問題に対応した導入方法をどのように認識したのかを明ら

かにすることを目的とした。その結果、以下の2点が示された。

第1に、責任学習モデルを実施した体育教師は、責任学習モデルの導入に伴う問題として、課題を抱えた中学校では遂行が難しい責任学習モデルにかかわる手続きがあること、またこの問題に対応した導入方法として、それらの手続きを省略、あるいは、簡易化してもよいと考えていたことが示された。

第2に、責任学習モデルを実施した体育教師は、責任学習モデルの教育効果を高めるために不可欠な手続きとして、生徒に守らせる行動目標を段階的に示したレベル表の掲示とレベル表をもとに行動目標を生徒に意識させることの重要性を認識していたことが示された。

しかしながら、本研究では、以下の課題が残された。

分析の終了を判断する理論的飽和化に向けて対象者を増やす必要がある。例えば、本研究で対象とした体育教師とは異なる経験年数の教師、あるいは、主任などの役職についている教師などである。本研究では、責任学習モデルを実施した体育教師にインタビューを行う必要があったため、対象者が2名となった。この2名の分析結果をベースとして、今後追加データを収集し、本研究によって得られた結果図の妥当性を検証する必要があるように考えられる。

付記 本研究はJSPS 科研費 JP19K11631 の助成を受けたものです。

注

1) Hellison (2003) が開発した“Teaching Personal and Social Responsibility Model”は、身体活動を通して個人的、社会的責任をとること教える指導モデルであった。日本には、友添 (2009) が最初に紹介し、「体育における責任学習」と呼称した。その後、梅垣ほか(2011)は、指導モデルであることが理解できるように「責任学習モデル」と表記した。

2) 「荒れた学校の改革に体育授業で取り組む」

というタイトルから理解できるように、荒れた小学校を対象に責任学習モデルを導入した。小学校が特定されないように著者をK小学校教諭と表記している。

3) 本研究は、日本スポーツ教育学会第38回大会における梅垣ほか (2018) の口頭発表をもとに、加筆・修正したものである。梅垣ほか (2018) では、責任学習モデルを実施した体育教師へのインタビューから特に責任学習モデル導入による教育効果に焦点をあてて発表した。本研究では、責任学習モデルの体育授業への導入に向けて、責任学習モデルを体育授業に導入する際に生じる問題とこの問題に対応した導入方法の検討に焦点を当てて分析を行った。

4) 柔道単元 (6 時間) に導入した責任学習モデルの効果について、比嘉ほか (2019) は、責任学習モデルが、生徒の社会的スキルに及ぼす影響および体育授業中における抽出生徒の行動に及ぼす影響について検証した。特に、課題を抱えた中学校を対象としたため、調査に真面目に取り組まない生徒が多く見受けられた。そこでは、有効回答数 (単元前後の調査に参加し、回答に不備のない生徒) を多く得ることのできた中学校第3学年の男子生徒の結果を報告した。

本研究では、責任学習モデルを実施した中学校の体育教師に、先の結果をみせながらインタビューを行い、日本の体育授業への責任学習モデルの導入に伴う問題とこの問題に対応した導入方法を明らかにすることを目的とした。

5) 責任学習モデルの効果を検証した梅垣ほか (2011) および梅垣ほか (2016) は、責任学習モデルの効果が保持されないことを明らかにした。本研究では、責任学習モデルの効果が保持されたかどうかを体育教師がどのように認識したのかについて確認をするため、授業実施から5か月後にインタビューを行った。

文献

- Hellison, D. (2003) Teaching responsibility through physical activity, second edition. Human Kinetics.
- Hellison, D. and Martinek, T. (2006) Social and individual responsibility programs. In: Kirk, D., Macdonald, D., and O'Sullivan, M. (Eds.) The handbook of physical education. Sage, pp.610-626.
- 比嘉靖・梅垣明美・村上なおみ (2019) 中学生の社会的スキルに及ぼす責任学習モデルの効果. 大阪体育大学紀要, 50: 39-51.
- 木下康仁 (2003) グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践 質的研究への誘い. 弘文堂.
- 木下康仁 (2007) 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (M-GTA) の分析技能. 富山大学看護学会誌, 6(2): 1-10.
- K 小学校教諭 (2015) 荒れた学校の改革に体育授業で取り組む. 体育科教育, 63(1):40-44.
- 松浦善満・中川崇 (1998) 子どもの新しい変化(「荒れ」)と教職に関する研究—小中学校の担任教師調査結果から—. 和歌山大学教育学部教育実践研究指導センター紀要, 8:1-10.
- メリアム:堀薫夫・久保真人・成島美弥訳 (2004) 質的調査法入門—教育における調査法とケース・スタディー. ミネルヴァ書房.
- 文部科学省 (2018) 平成 29 年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果について.
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/30/10/_icsFiles/afield-file/2018/10/25/1410392_1.pdf, (参照日 2018 年 12 月 23 日).
- 岡崎茂 (2018) 学校の「荒れ」と生徒指導—中学校での事例分析を通して—. 学校教育実践研究, 1: 47-57.
- 田中裕之・濱田晋也 (2015) 責任学習モデルを通して生徒たちと向き合う. 体育科教育, 63(5): 48-52.
- 友添秀則 (2009) 体育の人間形成論. 大修館書店.
- 梅垣明美 (2015) 体育授業の中で行う生徒指導. 体育科教育, 63(1): 22-26.
- 梅垣明美・友添秀則・小坂美保 (2006) 体育における人格形成プログラムの有効性に関する研究. 体育科教育学研究, 22(2): 11-22.
- 梅垣明美・草島進之介・上谷浩一 (2011) 中学校における責任学習モデルの効果に関する実証的研究. 体育学研究, 56(1): 157-172.
- 梅垣明美・大友智・南島永衣子・上田憲嗣・深田直宏・吉井健人・宮尾夏姫 (2016) 中学校の体育授業における TPSR モデルの効果の転移及び保持に関する検討. 体育学研究, 61(2): 503-516.
- 梅垣明美・比嘉靖・村上なおみ (2018) 責任学習モデルの中学校教育への影響プロセスとその活用法—保健体育科教師へのインタビューを通して—. スポーツ教育学研究第 38 回大会号, p.20.
- (2019 年 6 月 13 日受付, 2019 年 7 月 9 日受理)